

刊 行 の 辞

2025年の本センターは、3回の公開シンポジウムを精力的に開催し、新書も刊行しました。

1月25日には「タウン&ガウン構想」に加わり、今治市で「写し霊場と地域社会」を開催しました。この構想は、タウンとガウン（まちと大学）が一体となり、持続的な地域の発展と大学の進化を目指し「知の共創拠点今治」を構築する試みです。

佐渡島の調査を行っている立教大学教授・門田岳久氏は、まず聖地の概念を整理し、人間を越えた聖なる場所から、人間が作る聖地へと変化することを指摘し、写し霊場を誰が作りどう変化するかを明らかにしました。佐渡では、宝暦年間（18世紀半ば）にまず観音霊場が誕生し、19世紀になると小さな四国霊場ができ、文化12年（1815）全島を巡る四国霊場へと発展します。興廃を繰り返し、戦後旅行社が再興し、霊場会も生まれ、写しではない独自の霊場として現在に至っています。

愛媛大学特定准教授・大本敬久氏は、様々な写し霊場の形を示し、愛媛県には120カ所の新四国霊場があり、全国でも青森県から宮崎県までの125例を紹介しました。なかでも今治市大島には、年中行事として島民が食事・菓子を接待し、無料で宿泊させる善根宿の習俗があること、現在でも四月第三土日月曜日は「へんろ市」と呼び、集中的に接待する特徴を述べました。

今治市村上海賊ミュージアム学芸員・松花菜摘氏は、大島に残る史料に基づいて、その歴史を明らかにしました。文化4年（1807）本庄村の医師毛利玄得・修験者金剛院玄空・庄屋池田重太が札所を定め、弘法大師の絵を奉納し、案内本も出版されますが、翌年には今治藩から処罰を受けています。その後、仁和寺から「新四国」ではなく「准四国」と称するようという命令が出ます。一日2~300人が参詣して島のにぎわいを意識したとも記録されています。過疎化による札所の維持は課題ですが、ウォークやマラソンイベントなども開催して、伝統文化の継続が図られています。写し霊場は19世紀に一斉に誕生するため、記録が残っていることが多く、その背景にある本四国の状況分析にも役立ちます。

4月7日には、スペイン大使館の招聘で来日したホセ・トノ・マルティネス博士を本学にもお招きし、胡の報告と合わせ「サンティアゴ巡礼と四国遍路」を開催し、神話に基づく聖地の重層的な歴史を紹介し、史実と信仰の関係を議論しました。

『四国遍路史料集 古代・中世編』刊行を機に、11月1日には四国遍路の原型創造に関わった「空海の史実」と、没後に伝承されていく「弘法大師の真実」についてシンポジウムを企画しました。平安時代に観賢の上奏によって、延喜21（921）年、空海の没後86年にして醍醐天皇が弘法大師の号を贈ります。観賢がその姿を確認したことにより、永遠の瞑想を続ける大師の姿が信仰されるようになります。

文化庁主任文化財調査官の渋谷啓一氏は、同時代の史料から空海の幼少期の実像を示し、大師賜号の後、誕生や幼少期の物語が東寺を中心に創生され、誕生の寺として善通寺がクローズアップされてくる信仰の歴史についても述べました。伝承がなぜ生まれ、何を読み取るかは、四国遍路研究にとっても重要とされます。

前センター長の寺内浩氏は、入唐前の空海の史料を精査することで、空海は大学を退学した後、四国に住んで修行し、太龍寺・室戸岬・石鎚山・出石寺が修行地にあたること、師僧がないまま31歳で得度したことを明らかにしました。

香川県立ミュージアム学芸課長の三好賢子氏は、弘法大師の伝承を元にした多様な肖像画を紹介しました。出家して空海の弟子になった真如親王が描いたという御影を元に写されていきますが、鑑真や最澄像とともに作成されることもあり、真言・天台・南都六宗を融合する信仰のかたちを見ることができると言います。

空海ら多数の高僧が輩出された讃岐国は豊かであったこと、空海の活躍は、平安京造立・蝦夷との戦争・薬子の変・疫病流行などの社会背景があって、政治よりも宗教が必要とされたことなどが議論されました。

シンポジウムでは、世界遺産に向けて四国遍路の地を四国全体で守っていく期待も寄せられ、本センターの役割も再認識されました。末筆ながら、今後とも本センターへの御支援・御協力をお願いいたします。

愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター長 胡 光